

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈共同研究プロジェクト紹介〉

基幹型：日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究 東北アジア言語地域の位置付けに向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ホイットマン, ジョン, WHITMAN, John メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000829

東北アジア言語地域の位置付けに向けて

On the Northeast Asia as a Linguistic Area

ジョン・ホイットマン (John WHITMAN)

1. 始めに

明治期以来、「日本の起源」「日本語のルーツ」などのテーマをめぐる日本国内外の研究の焦点は、比較法 (Comparative Method) に基づいた系統論的研究に当てられてきたとってよからう。こういった研究の中、日本語とさまざまな言語との系統論的關係が提唱され検討されてきたが、世界の歴史言語学者の過半数の承認を得たものはない。現段階では、科学的に確信を以ていえることは、与那国語・八重山語・宮古語・沖縄 (本島) 語・奄美語という5つの言語からなる琉球語族と、本土諸方言からなる「本土語」がともに成す日琉語族が1つの「小語族」(small language family) を形成し、アイヌ語諸方言とともに、日本列島の土着言語 (語族) である、ということである。この事実を踏まえて、日本語が孤立言語 (language isolate) だといういいかたは正確ではない。東北アジアの多くの言語と同様、日本の標準語は小語族の中の一言語であるというべきなのである¹。

系統論的研究とは別に、日本語を含めた言語地域 (language area) に焦点を当てた研究が近年、注目を集めつつある。代表的なものは Johanna Nichols (1994, 2014) の“Pacific Rim” (環太平洋) 諸言語と松本克己 (2007) の「環太平洋言語圏」の研究である。同じ「環太平洋」という表現を使いながらも、2人の研究者は正反対に近い結論にたどりつく。Nichols (1994) は、世界の言語を11の地域に分類し、それらの言語地域毎に8点の音韻・形態・文法的特徴 (声調の有無, 1人称単数代名詞における子音 /m/ の有無, 能格性など) の調査を行った。その言語地域の中で、オーストラリア、ニューギニア、南・東南アジア、北アジア、北米大陸西部、中米 (Mesoamerica)、南米が環太平洋 (Pacific Rim) に位置するものである。調査の結果、Nichols は環太平洋地帯の両最南端にある言語地域 (オーストラリア・ニューギニア、中米・南米) が言語類型論的に多くの共通性を示すことを明らかにした。Nichols はこの共通性を、人類の移動に関連付けようとし、ヒトが環太平洋地帯を反時計回り・時計回り両方向に、南・東南アジアから出発してオーストラリア・ニューギニアへ、または北アジア→北米大陸西部→中米→南米へと移動した結果、もっとも早い時代に出発地を出た集団が最終的

¹ 日琉語族と日本列島以外の語族との系統論的關係の可能性については、筆者は依然として朝鮮語・済州語からなる朝鮮語族がもっとも有力な候補と考える。Whitman (2011) を参照されたい。

に環太平洋地帯の両最南端に至り、共通の類型論的特徴を運んで行ったとしている。その結果、例えば包括的一人称複数・除外的一人称複数の対立 (first person inclusive-exclusive distinction)、前・後置詞の不在、1 人称単数代名詞における子音 /m/, /n/ の不在などの特徴はオーストラリアにもっとも多く、その次に中米か東北米大陸、その次に南米に多いといったような分布が見られる (Nichols 1994: 210)。それに比べ、北アジア言語地域はヨーロッパやアフリカ、南・東南アジアにより近い特徴を示す。つまり、Nichols の研究では北アジア言語地域とそれ以南の環太平洋地帯の言語との相違点が強調される。

それに対して、松本 (2007) は「環太平洋言語圏」全体の共通点を重視している。松本は Nichols の研究を引用していないが、Nichols と同様に人称代名詞の形に着目しており、環太平洋言語圏に亘って一定の類似性を見つけ出す (松本 2007: 265)。方法論上の違いがあるため、Nichols の研究と松本のそれを直接に比較することはできないが、2 人の研究者による言語地理学の観点からの日本語 (日琉語族) の位置付けには共通点がある。Nichols は日本語を「北アジア」(North Asia) 言語地域に入れるのに対して、松本は環太平洋言語圏をいくつかの階層に分け、日本語が入る上位階層を「ユーラシア太平洋語群」として、下位階層は「環日本海語群」とする。本稿では、基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」を紹介しながら、日本語、厳密にいうと日琉語族がどの言語地域に属するかについて検討する。

2. プロジェクトの紹介

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」は、日本列島とその周辺の言語を主な対象とし、その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって、東北アジアが 1 つの「言語地域」として成り立つかどうかを検証することを目的としてきた。プロジェクトは 3 つの班に分けられている。「形態統語論班」は「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語にも見られる名詞修飾形 (連体形) の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能と形と歴史的变化を究明する。「音韻再建班」は、日本語とその周辺の諸言語の歴史的音韻再建を試み、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。平成 25 年からは、アンナ・ブガエワ特任准教授をリーダーとする「アイヌ語班」を加え、日本列島において唯一日琉語族と共存するアイヌ語の言語類型論的研究を行っている。また、3 つの班とは別に、人間文化研究機構の連携研究として、「日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散—「農耕／言語同時伝播仮説」をめぐる—」と題する共同研究を組織し、国立国語研究所・総合地球環境学研究所を中心に、国内外の言語学者・考古学者・植物遺伝子学者を集め、いわゆる「農耕／言語同時伝播仮説」(Bellwood and Renfrew 2002) の是非を日本列島・アジア・太平洋において検証する企画を行ってきた。さらに、プロジェクトの海外研究事業として、米国コーネル大学と 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAF8) (第 8 回アルタイ形式言語学学会) と Workshop on Suspended Affixation を共催し、ヘルシンキ大学地域言語研究センター (HALS, Helsinki Area and Language Studies, フィンランド) とはサハリン (ロ

シア)での言語調査と2回の国際学会を共催してきた。現在のところ、プロジェクトの研究
成果刊行物としては下記の3点があげられる。

1. 2014. *Korean Linguistics* 15(2) (オランダ Brill 社), Special Issue on Korean Historical Linguistics. Young-Key Kim-Renaud and John Whitman (eds.) 一本プロジェクト「音韻再建班」メンバーの論文を3本収録
2. 2015. *Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics* (WAFL8). MIT Working Papers in Linguistics 70. Esra Predolac and Andrew Joseph (eds.) 一本プロジェクト「形態統語論班」メンバーの論文を3本収録
3. 2015. 『アイヌ語研究の諸問題』(北海道出版企画センター) アンナ・ブガエワ, 長崎郁(編) 一本プロジェクト「アイヌ語班」メンバー7人の執筆による論文集

また、下記の4点が査読・編集集中である。

1. 平子達也, 田窪行則, ジョン・ホイットマン(編)『琉球諸語と古代日本語』(くろしお出版) 一本プロジェクト「音韻再建班」メンバーの論文を5本収録, 現在査読中
2. 西山國雄, James Yoon(編) *Suspended Affixation* (*Lingua* (オランダ Elsevier 社) に提出した特集号) 一本プロジェクト「形態統語論班」メンバーの論文を2本収録, 現在査読中
3. John Whitman and Mark Hudson (eds.). *The Farming/Language Dispersal Theory Reconsidered, with a Focus on East Asia*. (*Language Dynamics and Change* (オランダ Brill 社) に提出した特集号) 一連携研究「日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散—「農耕／言語同時伝播仮説」をめぐって—」メンバーの論文を3本収録
4. Ekaterina Gruzdeva and Juha Janhunen (eds.). *Linguistic Crossings and Crosslinguistics in Northeast Asia*. (forthcoming). Helsinki: Finno-Ugrian Society Press. 一本プロジェクト「形態統語論班」メンバーの論文を6本収録, 内部査読中
5. Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans (eds.). *Handbook of Polysynthesis*. Oxford: Oxford University Press. 一本プロジェクト「形態統語論班」メンバーの論文を3本収録, 現在査読中

3. 言語地域の設定

3.1 言語地域と言語連合

本プロジェクトの研究目標は日本語(日琉語族)とその周辺の言語との関わりを明かしながら、日琉語族と周りの言語地域のありさまを明らかにすることである。以下にプロジェクトの研究成果をいくつか紹介するが、その前に、そもそも「言語地域」はいかにして定義されるのかを押さえておきたい。「言語地域」(linguistic area)はドイツ語の Sprachbund 「言語連合」に由来する用語で、複数の、系統論的關係が必ずしも成り立っていない言語が、借用・言語接触・マルチリンガリズムにより、強い類似性を示す現象を意味する。バルカン言語地

域（言語連合）、カフカス言語地域、南アジア言語地域がその典型例である。Nichols (1992, 1994) が設定する世界の 11 の言語地域は従来の Sprachbund 「言語連合」より地理的範囲が広い。上に述べたように松本 (2007) は日本語をより狭い「環日本海語群」に入れ、日本語と「アルタイ語族」との関係については慎重である。範囲が違うとはいえ、2 人とも日琉語族を東北アジアのある言語集団に位置付けているが、いうまでもなく、今までの研究には日本語と南・東南アジアとの類型論的類似性を重視する研究も少なくない。ここで問われるのは、言語地域を設定する場合、どのような基準を認めるべきかという問題である。果たして客観的に言語地域を設定する基準はあるのだろうか。

3.2 言語類型論的特徴の統計学的分析

この問いに関しては、ここ数年の間に起こった言語類型論的データの革命的増加が重要な手がかりになる。従来に比べて、言語類型論的データが大量且つある程度数量化された形で手に入るようになってきているのである。本プロジェクトでは、数年前から統計数理研究所の小野洋平氏と共同で、*World Atlas of Language Structures* (*WALS Online*, Dryer and Haspelmath 2013, 以下 *WALS*) の統計学的研究を行っている。その研究の主な目標は、*WALS* に収録された言語類型論的素性（フィーチャー）の相関関係を解明することである。*WALS* は 55 人の言語学者がドイツのマックス・プランク研究所で構築したデータベースである。データベースには 2,676 言語に関する 192 のフィーチャーがデータ化されているが、言語によって数フィーチャーしか指定されていないものもあれば、示された言語が比較的少ないフィーチャーもある。本研究では 192 点のフィーチャーを、*WALS* の著者たちが指定した 200 言語のサンプルに適用して調べた。このサンプルは地理・語族の観点において均衡のとれたものである。

研究の出発点は Tsunoda, Ueda and Itoh (1995) による先駆的研究である。Tsunoda 他 (1995) は、言語の分類を試みる多くの数量言語類型論研究と違って、パラメータ（つまりフィーチャー）の分類を行った (Cysouw 2007 も参照)。Tsunoda 他 (1995) は 130 の言語について、19 の語順に関するパラメータを検討し、統計学的な分析を行った。その結果、語順に関わるパラメータの最大分岐は「前置詞」(preposition) 対その他、つまり前置詞を有する言語対それ以外（後置詞を有する言語、または前置詞も後置詞もない言語）であることが判明している。

Ono, Whitman, Yoshino and Hayashi (2013), ホイットマン・小野 (2014) と Whitman and Ono (to appear) では、小野氏が *WALS* のサンプルの 192 点のフィーチャーと 201 の言語に「多重対応分析」(Multiple Correspondence Analysis, MCA) を適用し、そのアウトプットにクラスター分析を行った。分析したフィーチャーは語順などの文法、形態論に関連するもののみならず、音韻を含めて *WALS* に十分な情報があるすべてのものである。この分析法では、まず多重対応分析によりフィーチャーと言語の相関関係が数次元の図形で示される。図 1 は、対応分析によるフィーチャーの座標を第 1 次元と第 2 次元で示したものである (Whitman and Ono to appear)。

192 点のフィーチャーのうち、値が 2 つ以上（例えば *WALS* フィーチャー 85A “Adpositions”

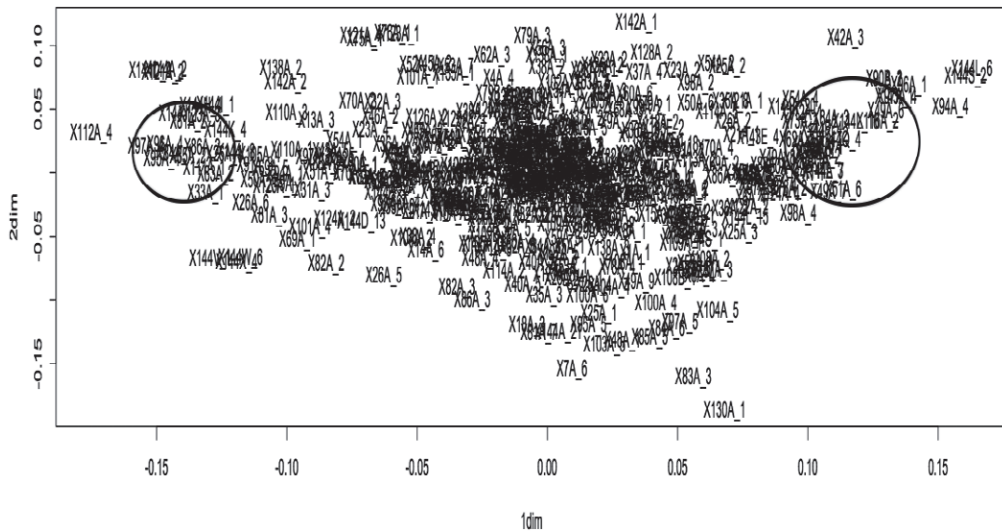


図1 多重対応分析 (MCA) による 489 のフィーチャーの値の分析 (1・2次元)
(Whitman and Ono to appear. 分析は小野洋平による)

では, Prepositions, Postpositions, No adpositions という3つの値) とするためには, フィーチャーの対応分析では実は 489 点のデータポイント (フィーチャーの値) を分析することになる。図全体の傾向は捉え難いが, 第1次元の正值の方には「主要部後置型」の値が集中しており (○で囲んだ部分), 負値の方には「主要部前置型」が集中している (○で囲んだ部分)。このように, 語順に関わる「主要部後置型」と「主要部前置型」がそれぞれ集中して分布することが分かる。

MCA のアウトプットにクラスター分析を適用すると情報を幾分か失うが, 言語とフィーチャーの占める距離関係がより明確に捉えられる。その結果, 5つのクラスター (以下, それぞれクラスター A, B, C, D, E とする) に区別できることが分かった (Whitman and Ono to appear)。

クラスター A はほとんどすべて主要部前置型の値である。語順に関わるもの以外のフィーチャーは3点しかない。クラスター A に収まるフィーチャーの値とその分類精度を表1 (次ページ) にまとめる。

表1 から分かるように, 分類精度がもっとも高いフィーチャーは WALS の 81A-86A で, すべて語順を示すものである。その値 (2か1) はすべて主要部前置型である。例えば 81A_2, 83A_2, 84A_1 は動詞句 (VP) 内で主要部の動詞が句の左端にある語順を指定する値である。Tsunoda 他 (1995) が着目した「前置詞」(85A_2) も高い分類精度でこのクラスター A に出てくるが, Tsunoda 他と違って, 「前置詞」がほかの主要部前置型のフィーチャーより分類精度が高い結果は本研究では得られなかった。クラスター A で分類精度が高い値は文中の動詞と前置詞の語順を定めるものと, 名詞句 (NP) の中で主要名詞と属格名詞の順序を指

表 1 クラスタ A のフィーチャーとその分類精度

parameter	values		classification accuracy (%)	Area
X81A_2	2 : SVO		87.76	Word Order
X83A_2	2 : VO		87.80	Word Order
X84A_1	1 : VOX		93.18	Word Order
X85A_2	2 : Preposition		90.77	Word Order
X86A_2	2 : Noun-Genitive		89.47	Word Order
X94A_1	1 : Initial Subordinator word		74.70	Word Order
X95A_4	4 : VO and Preposition	Complex feature		Word Order
X96A_4	4 : VO and Nrel	Complex feature		Word Order
X97A_4	4 : VO and Nadj	Complex feature		Word Order
X144A_2	2 : SNegVO	Complex feature		Word Order
X144D_2	2 : SNegVO	Complex feature		Word Order
X144H_4	4 : No NegSVO	Complex feature		Word Order
X144I_1	1 : Word&NoDoubleNeg	Complex feature		Word Order
X144J_7	7 : No SVNegO	Complex feature		Word Order
X144K_4	4 : No SVONeg	Complex feature		Word Order
X1A_3	3 : Average		43.33	Phonology
X28_1	4 : No case marking		45.53	Morphology
X105_3	3 : Secondary-object construction		44.44	Syntax

定するものである²。そのほかに、94A_1「接続詞が前置型」も主要部前置型の値であるが、分類精度がやや落ちる。表 1 の 95A_4 から 144K_4 もすべて前置型もしくは前置型と矛盾しないフィーチャーの値であるが、これらのフィーチャーには語順の特徴が 1 つ以上組み合わせられている（例えば、95A_4 には「動詞-目的語」並びに「前置詞」という、2 つの類型論的特徴が 1 つのフィーチャーになっている）。こういうフィーチャーは Complex feature 「複雑素性」と呼ぶのであるが、単独の特徴を表すフィーチャーとは比較することができないので分類精度を計算しなかった。クラスタ A のフィーチャーの中、語順または主要部前置型とは関係ないのは、1A_3 “Consonant system (Average) 201”, 28_1 “Case syncretism (No Case marking) 128”, 105_3 “Give (Has secondary object construction) 65 (third most common)” の 3 つのフィーチャーだけである。1A_3 と 28_1 はそれぞれ無標の、つまりもっとも多くの言語に示される値だから上位クラスタである A に現れるのだろうと思われる。105_3 だけは無標ではないので、二重目的語構文と主要部前置型の語順との関係に関しては更なる検討が必要である。

2 つ目のクラスタには語順が主要部後置型の値が集中している。このクラスタ B のフィーチャーの値とその分類精度を表 2 に示す。

² この事実の通時論的解釈については、Whitman and Ono (to appear) を参照されたい。

表2 クラスター B のフィーチャーとその分類精度

parameter	values	classification accuracy (%)	Area
X87A_2	2 : Noun-Adjective	45.54	Word Order
X88A_2	2 : Noun-Demonstrative	61.76	Word Order
X89A_2	2 : Noun-Numeral	50.67	Word Order
X90A_1	1 : Noun-Relative Clause	64.29	Word Order
X90C_1	1 : Noun-Relative Clause (NRel) dominant	64.29	Word Order
X91A_2	2 : Adjective-Degree word	40.63	Word Order
X91A_3	3 : Adj-Deg : No dominant order	66.67	Word Order
X143F_1	1 : VNeg	Complex feature	Word Order
X144I_8	8 : No SNegVO	Complex feature	Word Order
X143A_2	2 : VNeg	Complex feature	Word Order
X2A_3	3 : Vowel Inventory Large (7-14)	52.94	Phonology
X29A_1	1 : No subject person/number marking	45.61	Morphology
X100A_1	1 : Alignment : Neutral	47.92	Syntax

クラスター B のもっとも分類精度の高いフィーチャーも語順に関わるものであるが、クラスター A と違って、名詞句内の語順に関わるものである。クラスター A と同様、すべて主要部前置型の値 (Noun-Adjective, Noun-Demonstrative, Noun-Numeral など) を指定している。語順に関係しない 2A_3 と 100A_1 は無標の値である。

次のクラスター C を表3 (次ページ) に示す。クラスター C はいわばクラスター A の鏡像である。このクラスターでも語順のフィーチャーが支配的だが、その値は例外なしに主要部後置型である。語順に関わらない 2A_1 “Vowel Quality (Small)” は有標であるが、それはおそらく無標の値 2A_3 がすでにクラスター B に入っているためだろう。

クラスター D の詳細は省くが、このクラスターはクラスター B の鏡像である。クラスター B と同様、名詞句内の語順に関わるフィーチャーがもっとも分類精度が高いが、その値はすべて主要部後置型である。語順に関わらないフィーチャーは、無標のものか、クラスター A, B, C には出なかった値である。

残るクラスター E は「残り物」の、つまり A, B, C, D に収まらなかったフィーチャーの集まりである。このクラスターに限って、類型論的な一貫性が見当たらず、A, B, C, D に出なかった、有標な値が多い。

このように、ホイットマン・小野 (2014) と Whitman and Ono (to appear) の研究で分かったことは、WALS の 192 のフィーチャーを統計学的に分析すると、語順に関わるフィーチャーが圧倒的な力を示すことである。5つの上位クラスターの中の4つにおいて分類精度の高いフィーチャーが語順に関わるものであった。WALS には語順以外のフィーチャーが多くある。

表3 クラスターCのフィーチャーとその分類精度

parameter	values		classification accuracy (%)	Area
X81A_1	1 : SOV		97.59	Word Order
X83A_1	1 : OV		97.00	Word Order
X84A_3	3 : XOV		100.00	Word Order
X85A_1	1 : Postposition		90.65	Word Order
X86A_1	1 : Genitive-Noun		81.90	Word Order
X90A_2	2 : Relative Clause-Noun		96.00	Word Order
X90B_1	1 : Relative clause-Noun (RelN) dominant		96.00	Word Order
X94A_2	2 : Final Subordinator word		95.45	Word Order
X94A_4	4 : Subordinating suffix		100.00	Word Order
X94A_5	5 : Mixed		90.48	Word Order
X95A_1	1 : OV and Postpositions	Complex feature		Word Order
X96A_1	1 : OV and RelN	Complex feature		Word Order
X96A_2	2 : OV and Nrel	Complex feature		Word Order
X97A_1	1 : OV and AdjN	Complex feature		Word Order
X143F_2	2 : [V-Neg]	Complex feature		Word Order
X144P_4	4 : No NegSOV :	Complex feature		Word Order
X144S_2	2 : Suffix&NoDoubleNeg	Complex feature		Word Order
X144S_11	11 : No SOVNeg	Complex feature		Word Order
X144A_7	7 : SONegV	Complex feature		Word Order
X144A_20	20 : MorphNeg	Complex feature		Word Order
X144R_1	1 : Word&NoDoubleNeg	Complex feature		Word Order
X144R_8	8 : No SONegV	Complex feature		Word Order
X143E_4	4 : None	Complex feature		Word Order
X143A_4	4 : [V-Neg]	Complex feature		Word Order
X144Q_4	4 : No SNegOV	Complex features		Word Order
X144L_3	3 : SONegV	Complex feature		Word Order
X144L_6	6 : SO[V-Neg]	Complex feature		Word Order
X144L_16	16 : ObligDoubleNeg	Complex feature		Word Order
X2A_1	1 : Small (2-4)		80.56	Phonology
X26A_2	2 : Strongly suffixing		76.32	Morphology
X126A_3	3 : Deranked		87.50	Syntax

音韻のフィーチャーが19あり、形態論・語彙・統語論のフィーチャーは非常に多いが、それらのフィーチャーによるクラスターは多重対応分析とクラスター分析では出てこない。Joseph Greenberg (1963/6) の研究以来、言語類型論の常識になった直感にも一致するだろうが、言語に亘ってもっとも一貫性を示すパラメータは語順のパラメータである。この「直感」が今回の研究により統計学的に裏付けられたといえるだろう。

3.3 言語類型論的特徴の統計学的分析と言語地域の設定

3.2で紹介した多重対応分析とクラスター分析を合わせた分析法では言語のクラスターを派生することもできる。WALSサンプルの192点のフィーチャーと201の言語にMCAを適用し、クラスター分析をそのアウトプットに適用した言語の分析を行った。そこから、言語のクラスターも語順に支配されることが分かった。日本語が入る上位クラスターはすべて主要部後置型の言語からなっている。日本語が入る下位クラスターにはある程度の地域性が見られる。同じ東北アジアの朝鮮語、ハルハ（モンゴル）語、ニヴフ語が日本語と一緒に入っているが、下位クラスターのほかの言語はチベット・ビルマ語族の主要部後置型の言語であるビルマ語、メーデー語（Meithei）、ガロ語（Garo）とラダキ語（Ladakhi）である。ほかのクラスターを見ても、オーストラリア、北南米の言語がばらばらな分布を示し、地域や語族のまとまりはない。そのため、WALSの類型論的データを用いてより地域性を出せないかと考え、次に、3.2でもっとも有力なフィーチャーであることが分かった語順のフィーチャー81A-86A（主語・目的語・動詞の順序、名詞句と前・後置詞の順序、主要名詞と属格名詞の順序）を除外し、言語の多重対応分析とクラスター分析を再度行った。その結果が図2（次ページ）である。

興味深いことに、もっとも有力な語順のフィーチャーを除くと、図2から分かるように地域性が明確に出て来る。日本語が入る最下位クラスターには日本語、朝鮮語、アイヌ語、ニヴフ語がともに入っている。そのクラスターと姉妹関係になっているビルマ語を除けば、松本（2007）の環日本海語群そのものである。その下位クラスターには日本語・朝鮮語・アイヌ語・ニヴフ語がそれぞれ姉妹のペアをなしていることも松本の分類と一致するが、本分析ではその分類がWALSの200近くのフィーチャーにより裏付けられているのである。

図2の分析ではそのほかの言語地域も明確に現れる。東北アジア大陸のクラスターとしてはトルコ語とハルハ（モンゴル）語、これら2つの言語とエヴェンキ語、これら3つの言語とユカギール語が出て来る。前者の3言語は従来のアルタイ語族に対応し、加わるユカギール語は同じシベリア地域の言語である。クテナイ語（Kutenai）からカロク語（Karok）までのクラスターは1言語を除いてすべて北米西部の言語からなる。ンギヤンパー語（Ngiyambaa）からピチャンチャチャラ語（Pitjantjatjara）までのクラスターはニューギニアの2つの言語を除けばすべてオーストラリアの言語からなる。カユババ語（Cayuvava）からラマ語（Rama）までのクラスターは中南米とニューギニアの言語からなる。このクラスターには、Nichols（1994）の仮説に沿って、環太平洋両南端の言語と一緒に入っている。

言語学入門の授業でよく指摘されるように、類型論的特徴を用いて語族の存在を証明することはできない。言語地域の設定においても、世界の言語に広く分布する特徴だけでは地域の設定が妥当か否か判断することは不可能である。WALSのような大量のデータでも、前述のように、地域的なクラスターよりも類型論的な固まりを示す傾向が強いが、本研究では、もっとも類型論的分析に働く特徴を除外すれば、従来の研究で指摘されたような言語地域が姿を見せ始める。日本語（日琉語族）に関していえば、本研究で紹介した分析法ではもっとも近隣の3言語、朝鮮語・アイヌ語・ニヴフ語がクラスターをなすことが分かった。

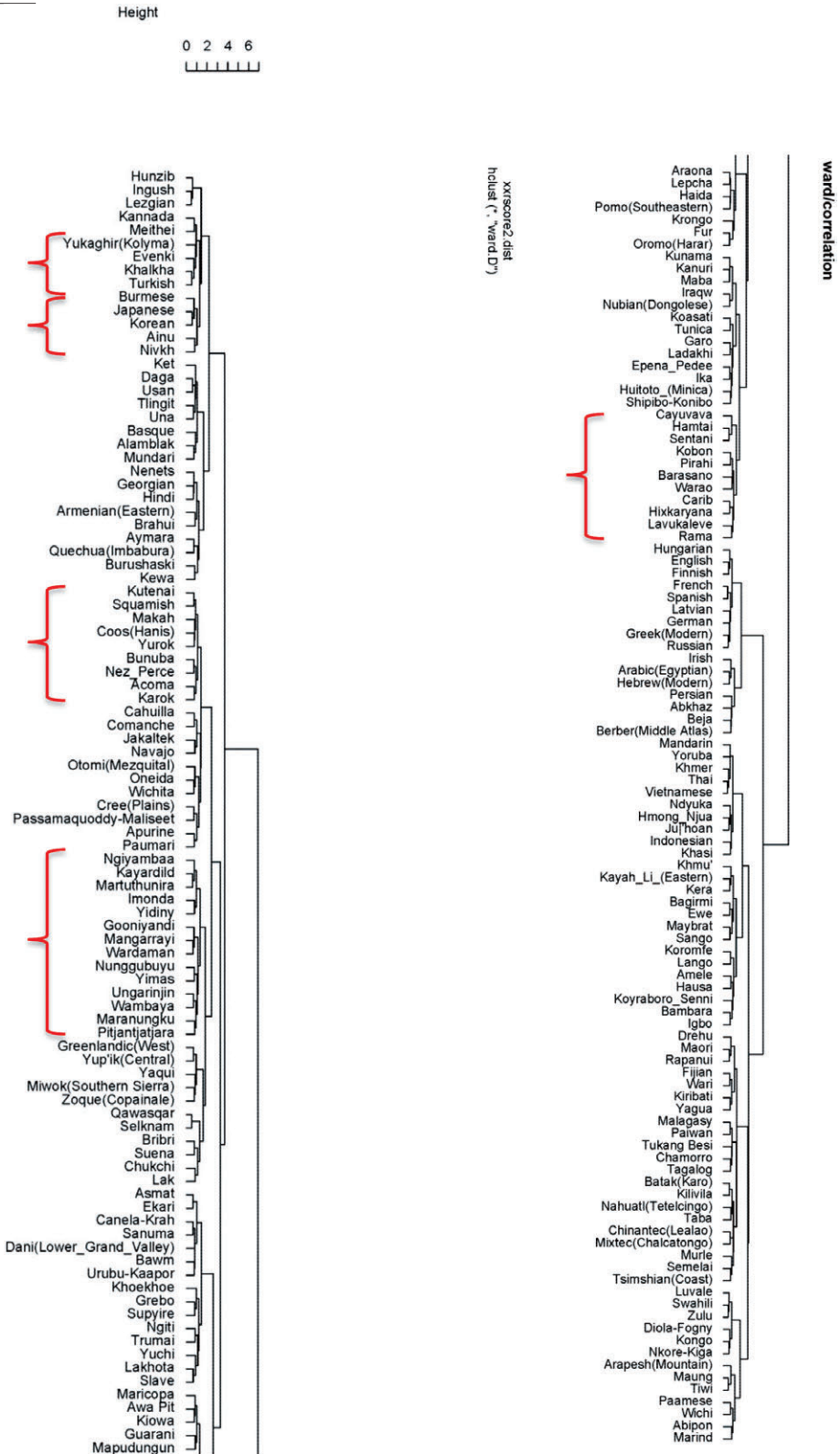


図2 語順のフィーチャー 81A-86A を除外した 201 の言語のクラスター分析 (分析は小野洋平による)

4. 東北アジア言語地域の類型論的研究—今後の展望

本稿で紹介した共同研究プロジェクトでは、仮に「東北アジア言語地域」を図3のように定義した。

3.3に述べたように、この地域の中で、WALSのデータに基づいた統計学的分析では日本語・朝鮮語・アイヌ語・ニヴフ語（図3のAmur語族）が1つのクラスターをなし、ハルハに代表されるモンゴル語族、トルコ語に代表されるチュルク語族、エヴェンキ語に代表されるツングース語族とユカギール語族（図3のYukaghir語族）がもう1つの、先のクラスターと姉妹関係にあるクラスターをなす。さらに、北アジア言語地域とその内部組織に関わるもう2つの地図を紹介する。

図4は、東北アジアにおける舌根母音調和（Tongue Root Harmony）の分布を示すもので



図3 東北アジア言語地域

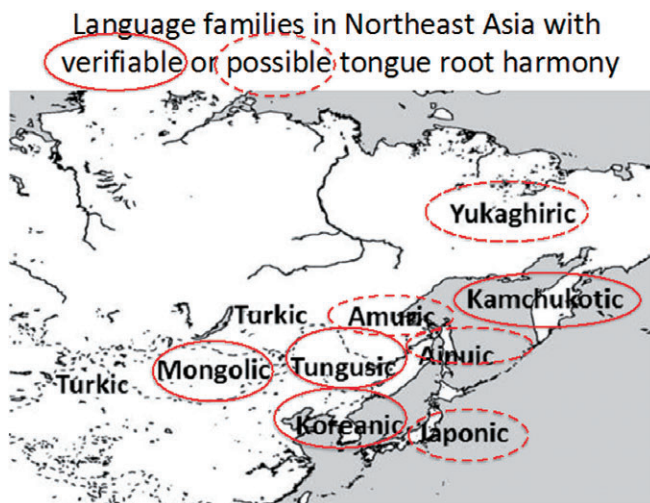


図4 東北アジア言語地域における舌根母音調和を有する言語または通時的に有した可能性のある言語

The distribution of laryngeal features and prosodic features in NE Asia

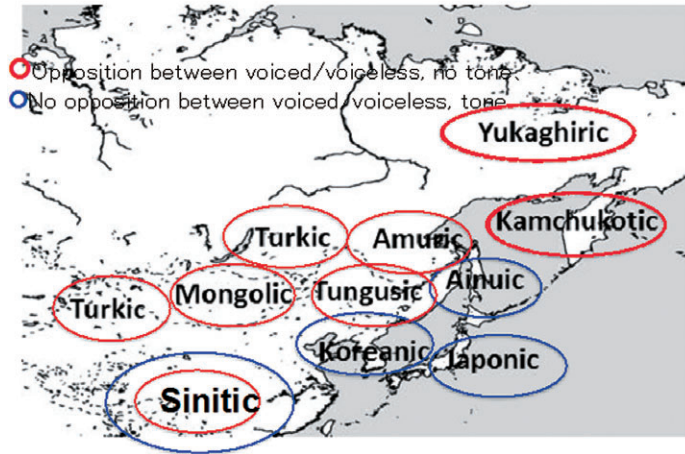


図5 東北アジア言語地域における声調（トーン）と有声音・無声音の対立の分布

ある。赤い○の付いた言語・語族は舌根母音調和の存在が確定された言語である。点線の赤い○に囲まれた言語・語族は歴史的に以前の段階に舌根母音調和はあった、もしくは限られた環境にしか残っていない言語・語族である。この地図から分かるように、舌根母音調和が明確にある言語は西と北にあり、その痕跡しか残っていない言語・語族は主に東と南に分布している。

図5は、東北アジアにおける語彙的声調（Lexical tone または Pitch accent）と有声音・無声音の対立の有無を示すものである。赤い○の付いた言語・語族は有声音・無声音の対立があって、声調がない言語である。青い○に囲まれた言語・語族は声調があって、有声音・無声音の対立がない（アイヌ語、朝鮮語）または歴史的になかった（日琉語族）言語である。この地図に限って中国語を加えたが、中国語は歴史的には有声音・無声音の対立があって、声調がない言語であったが、現在は声調があって、東北諸方言に関していえば有声音・無声音の対立がない言語群である。

図2のクラスター分析で見たような、東北アジア内の東西の対立は、図4、5でも見られる傾向であるが、朝鮮語、ニヴフ語のように中間に位置する言語は特徴によって分類が異なる。図4、5で紹介した類型論的特徴を含めて、今後東北アジア言語地域のその内部構造の更なる研究を期待したい。

●参照文献●

Bellwood, Peter and Colin Renfrew (eds.) (2002) *Examining the farming/language dispersal hypothesis*. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.

- Cysouw, Michael (2007) New approaches to cluster analysis of typological indices. In: Reinhard Köhler and Peter Grzbeq (eds.) *Exact methods in the study of language and text. (Quantitative Linguistics 62)*, 61–76. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dryer, Matthew and Martin Haspelmath (eds.) (2013) *The world atlas of language structures online*. Munich: Max Planck Digital Library. Available online at <http://wals.info/> Accessed on 2012-07-02.
- Greenberg, Joseph (1963/6) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In: Joseph Greenberg (ed.) *Universals of language*, 255–264. Cambridge: MIT Press.
- 松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語—日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂。
- Nichols, Johanna (1992) *Linguistic diversity in space and time*. Chicago: Chicago University Press.
- Nichols, Johanna (1994) The spread of language around the Pacific Rim. *Evolutionary Anthropology* 6: 206–215.
- Nichols, Johanna (2014) Explaining the origin and geography of polysynthesis. International Symposium on Polysynthesis, Feb. 20–21, 2014, National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Ono, Yohei, John Whitman, Ryozyo Yoshino, and Fumi Hayashi (2013) Investigating latent interrelationships between typological features: A factor/clustering analysis of feature values in *WALS*. Ms, Institute for Statistical Mathematics and National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Tsunoda, Tasaku, Sumie Ueda, and Yoshiaki Itoh (1995) Adpositions in word-order typology. *Linguistics* 33: 741–761.
- Whitman, John (2011) Northeast Asian linguistic ecology and the advent of rice agriculture in Korea and Japan. *Rice* 4: 149–158.
- ホイットマン ジョン, 小野洋平 (2014) 「*WALS (World Atlas of Language Structures)* の言語類型論的パラメータの統計論的解析とその通時論的解釈」『日本エドワード・サピア協会研究年報』28: 1–15.
- Whitman, John and Yohei Ono (2016, to appear) Diachronic interpretations of word order parameter cohesion. To appear in Robert Truswell and Eric Mathieu (eds.) *From micro-change to macro-change*. Oxford: Oxford University Press.

《要旨》本プロジェクト（日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究）の目的は、日本語とその周辺の言語を主な対象とし、その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって、東北アジアを1つの「言語地域」として位置付けることである。統語形態論の観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語においても見られる名詞修飾形（連体形）の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能と形と歴史的变化を究明する。歴史音韻論の観点からは、日本語周辺諸言語の歴史的再建を試み、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。本稿では、この共同研究プロジェクトを紹介しながら、日本語、厳密にいうと日琉語族がどの言語地域に属するかについて検討する。

Abstract: This paper describes the research activities of the joint research project “Diachronic and Typological Research on the Languages of the Japanese Archipelago and Its Environs”. A major focus of the project was to investigate the status of Northeast Asia as a linguistic area or Sprachbund. The project was made up of three teams: a team focusing on morphosyntax, one on phonological reconstruction, and one on the Ainu language, headed by Dr. Anna Bugaeva. The morphosyntax team investigated such topics as the role of nominalizations as a source for

main clause grammar in Northeast Asia and elsewhere. The phonological reconstruction team examined topics such as accentual change in Japonic and the status of tongue root harmony as a defining feature of the Northeast Asian Sprachbund. Another product of the project was an investigation of the statistical properties of the typological data in the *WALS* (*World Atlas of Linguistic Structures*) database (Dryer and Haspelmath 2013).

ジョン・ホイットマン (John WHITMAN)

コーネル大学言語学部教授。博士(言語学)(ハーバード大学)。ハーバード大学助教授、コーネル大学助教授、同教授、同 Chair (教授)、同 Director, East Asia Program、国立国語研究所教授を経て、2015年8月より現職。2011年8月～2015年8月、国立国語研究所言語対照研究系教授。

主な著書・論文： *Grammatical change: Origins, nature, outcomes* (Dianne Jonas, Andrew Garrett と共編, Oxford University Press, 2011), *Proto-Japanese* (Bjarke Frellesvig と共編, John Benjamins, 2008), The relationship between Japanese and Korean (*The languages of Japan and Korea*, Routledge, 2012), The classification of constituent order generalizations and diachronic explanation (*Language Universals and Language Change*, Oxford University Press, 2008).

社会活動： Editor, *Korean Linguistics* (John Benjamins), Associate Editor, *Cahiers de Linguistique-Asie Orientale* (EHESS, Paris), Associate Editor, *Language Research* (Seoul National University), Associate Editor, *SCRIPTA*, など。

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」

プロジェクトリーダー ジョン・ホイットマン

(コーネル大学 言語学部 教授／元 国立国語研究所 言語対照研究系 教授)

プロジェクトの概要

本プロジェクトは日本語とその周辺の言語を主な対象とし、その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって、東北アジアを1つの「言語地域」として位置付けることである。統語形態論の観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語に於いても見られる名詞修飾形(連体形)の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能と形と歴史的变化を究明する。歴史音韻論の観点からは、日本語周辺諸言語の歴史的再建を試み、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。平成25年からは、アンナ・ブガエワ特任准教授が中心となる「アイヌ語班」を加え、日本列島において唯一日琉語族と共存するアイヌ語族の言語類型論的研究を積極的に行う。

上記の3つのテーマに沿って、プロジェクトを「形態統語論班」「音韻再建班」「アイヌ語班」に分ける。このプロジェクトの大きな特徴は(1)類型論の観点と通時的言語学観点を組み合わせること、(2)言語類型論、国語学(日本語学)、言語学理論(統語理論・音韻理論)、記述言語学にわたる、幅広い理論・方法論の観点を代表する研究者を共同研究に取り入れることにある。